

# 平家物語の知盛像

——知盛は何を見たのか——

伊藤 益

## 序論

周知のように、平家物語は、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ」という八句を以て始まる。この著名な八句が、仏教的な無常の哲理に言及し、かつ、物語全体の主題を表明するものであることは、ことさらに強調するまでもない。平家物語は、栄華を誇る伊勢平氏一門の滅亡の模様を克明に描くことによって、人間の榮譽が必然的に衰滅への途を辿ることを、一つの絶対的な真理として強調する文芸である、と言えよう。保元、平治の乱を契機として急速に台頭し、一門の公卿十六人、殿上人三十余人、知行国三十余国を誇った平氏（卷一「吾身栄花」、清盛の義兄時忠をして、「此の一門にあらざらむ人は、皆人非人な

るべし」（卷一「禿髪」）とまで豪語せしめた平氏は、総帥清盛と当代の実質的な支配者後白河法皇とが対立関係に入ったことを機として、次第にその勢威を失い始める。高倉天皇に嫁した清盛の娘建礼門院徳子が男子を出産。その男子が天皇の座に即いた（安德天皇）ことによって、外戚の地位を確保した平氏ではあったが、程なく（治承四年、一一八〇年）以仁王が源頼政の支援を得て叛旗を翻すに至って、その支配権は大きく揺らいだ。わずかに数百騎を率いるにすぎない頼政と園城寺（三井寺）以外に同調する勢力をもたなかった以仁王の反乱は、圧倒的な平氏の動員力の前に泡沫のごとくに潰えたが、王が諸国に齎した令旨は、各地に逼塞していた源氏の蜂起を促した。すなわち、源氏嫡系の頼朝が関東で挙兵。その従弟義仲も信濃で兵を挙げ、それぞれ、在地の平氏勢力を駆逐するに至った。

その後、平氏は衰亡の一途を辿る。治承四年十月には富士川の合戦に大敗、翌五年二月総帥清盛を失う。さらに、寿永二年（一

一八三年)には、北陸での義仲軍との大会戦に惨敗し、都落ちを余儀なくされる。都落ち後の平氏は、在地勢力の反乱によって九州を逐われ、瀬戸内を漂泊する。寿永三年正月には、頼朝・義仲間の骨肉相食む争闘の間隙をぬって旧都福原に復し、そこを拠点として京都奪還をめざすが、同年二月の一ノ谷、生田を主戦場とする頼朝軍との決戦に完敗を喫し、再び海上の漂い人となった(敗戦後平氏は屋島に本拠を置くが、源氏軍のすばやい進撃の前に、その地を軍事的な拠点として要塞化することはできなかった)。翌元暦二年(一一八五年)三月、追い詰められた平氏は、壇浦で義経の率いる源氏の水軍に最後の戦を挑み、あえなく滅亡する。

平家物語の作者(平家物語の複雑な成立過程を顧慮するならば、作者は複数であった可能性もある。本稿では、以下、その複数性を暗に含意させながら、「作者」という語を用いる)は、平家衰滅の経緯を、鳥瞰的視座から冷静に凝視する。それは、衰滅の歴史が展開され終えたことを前提として、はじめて獲得されうる視座であって、物語の登場人物が有しうるものではない。登場人物たちは、さながら水流に浮かぶ木の葉のように、歴史の織り成す運命に翻弄されるばかりである。ところが、作者は、源平争乱の渦中を生きる一人の登場人物に、史的運命を見据える視座をもたせている。清盛の三男(厳密には四男)平知盛が、その人である。

平家物語によれば、知盛は、壇浦合戦の終局を迎えて、「見るべ

き程の事は見つ」と述べている(巻十一「内侍所都入」)。平氏の大將軍として数多の戦を戦ってきた知盛。いまた、壇浦合戦の一方の將として死力を尽くした彼には、平氏の滅びのさまが目にあたりに見えていた。その滅びに直面したことによって、知盛は、見るべきことをすべて見終えたと観じた。彼は、見るべきものを見尽くそうという意図のもとに数多の合戦を戦い抜いてきたのであり、彼の意志的な視線が、平氏の担う「運命」に向けられていることは疑えない。作者が語るものも、やはり、栄える者の滅びを定めとする運命にほかならなかった。知盛は、作者と視座を共有していることになる。すなわち、全篇を通じて一見端役の座を得ているにすぎないように見える知盛という人物の視線が、平氏滅亡の場面で作者のそれと重なりあっている。たしかに、知盛は、清盛、義仲、義経たちのような、物語の主たる構成要素を織り成す主要人物ではない。しかし、作者の思念は、実は、この知盛を通して鮮明に語られているのだと言ってよいであろう。知盛は、作者と同じ高みに立つて、平氏に纏わる「運命」を凝視する人物なのではないか。

とするならば、平家物語が何を語ろうとしているのかは、知盛の言動をつぶさに追うことによって明らかにしうるであろう。知盛は、何を思い、いかに行動しているのか。本稿では、主としてこの点に迫ることによって、平家物語が真に意図するところを明らかにしてみたい。

その際、一点注意を傾けておくべき事柄がある。それは、「見るべき程の事は見つ」と述べて、しかるべき事・物を見極めたことを明らかにしたとき、知盛が「見るべき」ものと認定していたものが「運命」であることは疑えないけれども、その「運命」を具象化する諸要素は、物語中での知盛の言動を具体的に追わないかぎり、鮮明にはなしえないという点である。本稿が考究の主たる対象としようとするのは、そうした具象的諸要素であり、したがって、考究は、すでに明白なものを跡づけることに終始するものではない。知盛は、何を以て「運命」を構成する事態、それを具象化する内質ととらえたのであろうか。「知盛は何を見たのか」という副題は、この点に関する疑問を端的に表示するものにほかならない。

なお、平家物語について何事かを論ずるに当たっては、何を以て平家物語とすべきかという点が重大な問題として浮上していく。いわゆる略本、広本という名称によって分けられる諸本のあいだには大きな差異が認められ、その差異は、ともすれば一つの物語としての統一性を無みすることにも繋がりがかねないからである。現在の研究においては、語り物系諸本がそれを基<sup>もと</sup>としたところの原態として延慶本を指定する見解が有力ではあるが、それは、そのままだちに延慶本が諸本の祖本であることを意味するわけではない。祖本、すなわち、平家物語の最古態を浮き彫りにすることは現下の状況では至難であり、したがって、「これこそが

唯一の平家物語」であると主張することは、目下のところかならずしも有意味であるわけではないと言わざるをえない。何を以て平家物語とすべきか」という問いは、現在の研究レベルでは厳密な意味での解答が不可能な問題である。

『徒然草』は、平家物語の成立について、次のように記す。

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の誉れありけるが、樂府の御論議の番に召されて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心憂きことにして、学問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸ある者をば下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。

この行長入道、平家物語を作りて、生仏<sup>しょうぶつ</sup>といひける盲目に教へて語らせけり。さて、山門の事をことにゆゆしく書けり。九郎判官の事は、くはしく知りて書きのせたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くの事どもを記しもらせり。武士の事・弓馬のわざは、生仏、東国の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。(第二百二十六段)

慈円(慈鎮)の保護下に信濃前司行長が盲人生仏の協力を得て制作し、それを生仏が語ったのが平家物語の初発であるとするこの言辞に、全面的な信憑を置くことは危険である。しかし、この言辞が平家物語の一つの歴史的態様を如実に伝えるものであるこ

とは否定できない。誰の制作によるにしろ、平家物語が琵琶法師たちによって語り継がれたことは事実であるし、その語りのなかで、ほかならぬこの物語の存在が衆庶の胸に刻みつけられていたこともまたたしかである。平家物語は、おそらく、単数もしくは複数の作者によって制作され、作者の意向を汲みそれを継承する人々によって語られつつ現存諸本の形態に膨張してきた作品なのであろう。当面の兼好の言辭は、平家物語のそうした原態様を端的に指示するものにほかならない。

琵琶法師たちによる語りは、機に応じて即興性を伴ったであろう。しかし、その即興性を可能にする基盤は、底本によってこそ保障されていたのではなかったか。すなわち、琵琶法師たちは、各々の流儀に即したテキストを保有し、大筋ではそれに依拠しつつ、それに即興の形で独自の語り口を加味していったものと考えられる。そうしたテキストのなかで、巷間に最も広く伝わったものの一つに一方流の覚一本がある（ただし、これは、覚一本が巷間に披見されたことを意味するわけではない）。換言すれば、覚一本に依拠する語りを通して、平家物語は、物語としての地歩を衆庶の精神の裡に確定した側面をもつと言ってよいであろう。

本稿では、おそらくは不可能な原態の再構成への意志を括弧のうちに閉ざして留保し、語りを介して巷間に流布する一態、すなわち覚一本を平家物語と見なす。以下の論究は、覚一本をめぐって展開されるもので、覚一本の内質と主題を問うものにほかなら

ない。（本稿では、覚一本からの引用は、すべて岩波新日本古典文学大系『平家物語（上・下）』に拠る。）

## 第一章 「運命」の受容者—重盛—

平家物語の登場人物のなかで、人格的に最も高潔な人物として描かれているのは、平重盛である。平家物語によれば、重盛は、未来のことを見とおす予知能力の保持者であるとともに、仏教的慈悲のこころと儒教的な仁義の精神とを併せもった人物で、雲上人はもとより広く衆庶の輿望を担っていたという。

保元物語や平治物語を参看するに、重盛が武勇にすぐれていたこと、したがって清盛の後継者として不足のない人物であったことは容易に推察できる。たとえば、保元物語によれば、天皇方が院方の本拠白河殿を夜襲した折、鎮西八郎為朝の弓勢に恐れをなした清盛勢が為朝の死守する大炊御門の西門を避けて他の門へ向かおうとしたとき、重盛は「口惜事をも仰せ候物かな。合戦の庭に出て、敵の強ければとてしりぞかんにおゐては、軍の勝負有べきかは。重盛にをひては、八郎が矢さきに一あたらんと思ひきりたり。爰にて戸をさらすべし」と述べて、ひとり西門に向かって進もうとした、という（中巻「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」—引用は、岩波日本古典文学大系『保元物語』に拠る）。こうした記事を、重盛と義朝の長子悪源太義平との激闘の模様を詳細

に描写する平治物語の記事（中巻「待賢門院の軍の事付れたり信頼落つること」などと照合するならば、重盛は、けっして不敗の猛将ではないけれども、すくなくとも勇敢さにおいて他の追隨を容易に許さない武将であったと推察しうる。

しかし、毅然として理非曲直を裁断し、一点の曇りもない徳義の実践者としてのその厳格にして篤実な風貌は、事実に根ざすというよりも、むしろ平家物語の作者によって造形されたものである可能性が高い。そのことの一端を示すのが、平家物語の「殿下乗合」の段（巻一）に描かれた、時の摂政藤原基房の行列への平家の侍たちによる狼藉事件（九条兼実の日記玉葉がこの事件の細部に言及している）である。

事件の発端は、重盛の第二子平資盛の一行が、鷹狩りの帰途藤原基房の行列に出会ったこと（嘉応二年七月のこと）にある。當時、官位上の上位者の行列に出会った場合、下位者は時に下馬の礼をとらなければならないという公式の定めがあった。すなわち、延喜彈正台式に「凡四位已下逢一位、五位已下逢三位已上、六位已下逢四位已上、七位已下逢五位以上、皆下馬」とあるのに従うならば、当時五位であった資盛は基房に対して下馬の礼をとらなければならなかった。ところが、資盛はこの定めを無視して、乗馬のまま行列のなかを駆け破ろうとした。摂政の従者たちは、これを遺憾として資盛とその一行を馬から引きおろし、恥辱を加えた。平家物語によれば、孫が被ったこの屈辱に激怒した清盛は、

報復を企てたという。すなわち、清盛は腹心の武士六十余名に命じて、内裏に参内する摂政の行列を襲わせ、摂政の従者たちのもとどりをことごとく切り取るなど、乱暴狼藉のかぎりを尽くさせたという。平家物語は、この報復行為を清盛の意に発するものと断じ、それを以て「世の乱れそめける根本」「平家の悪行のはじめ」（巻一「殿下乗合」と規定する。その上で、平家物語は、重盛が、子息資盛にこそ非ありとする判断に立つて資盛を叱責するとともに、狼藉に加わった侍たちを勘当した、と伝える。

平家物語の語るところによれば、典礼を無視して恣に行爲する者は清盛であつて、その長男重盛は、父の横暴をたしなめ、抑制する人物である。「殿下乗合」の段は、高潔の士重盛の面目躍如たるさまを示していると言えよう。しかしながら、平家物語の語りは、同時代者の伝聞と大きく食い違っている。すなわち、前掲玉葉や慈円の愚管抄によれば、報復行為の首謀者は、清盛ではなく重盛であつた。愚管抄は、当面の事件に関して、「コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクテ、父入道ガ謀叛心アルトミテ、『トク死ナバヤ』ナド云ト聞ヘシニ、イカニシタリケルニカ、父入道ガ教ヘニハアラデ、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ」と述べている（巻三―引用は岩波日本古典文学大系『愚管抄』に拠る）。平家物語には、平氏一門の傲岸不遜な所行をすべて清盛の奢りに起因するものと見なし、それを諫める良識の士として重盛を位置づけようという意図があつたのではないか。報復事件の首謀者を清盛とする

のは、おそらくは事実の改竄で、それ（改竄）は、登場人物を可能なかぎり類型化してゆこうという作者の意図に根ざしている、と考えられる。

類型化の一つの基準となるものは、各登場人物の「運命」に対する認識の仕方である。「未来の事」をまかねて悟ることのできる「不思議の人」たる重盛（巻三「無文」）を、平家物語の作者は「運命」を事前に把握し、かつそれに従容と従ってゆく人物と規定する。それに対して、清盛は、「運命」に従うどころかむしろそれに反抗する者、すなわち、運命への反逆者である（この点は後述）。

平家物語の重盛が、「運命」を予知する者としての相貌を最もあらわに示すのは、その死を描く段「医師問答」においてである（巻三）。同段によれば、重盛は、熊野本宮証誠殿の前で、祈願のことはを奏上した。それは、父清盛の悪心を和らげて子々孫々の繁栄を齎すか、さもなければ、わが寿命を縮めて欲しいと願うもので、清盛の悪行がおさまらぬかぎり一門の衰滅は如何とも為しがたいという認識によって貫かれていた。重盛は言う。

親父入道相国の体を見るに、悪逆無道にして、やゝもすれば君を悩まし奉る。重盛長子として、頻に諫をいたすといへ共、身不肖の間、かれもって服膺せず。そのふるまひを見るに、一期の栄花猶あやうし。枝葉連続して、親を顕し名を揚げん事かたし。

重盛は、平氏が子々孫々にわたって繁栄し、父祖の名を世に顕

揚することがもはやほとんど不可能になったと見ている。彼は、平氏の衰運をはっきりと看取しているのであり、そうした衰運が具体化する前にわが身がこの世のものではなくなることを切望している（重盛は、「栄耀一期をかぎって、後混恥に及べくは、重盛が運命をつづめて、来世の苦輪を助け給へ」と言っている―巻三「医師問答」）。程なくその願いは成就し、重盛は不帰の客となるのだが、渡来の医師の治療を拒み、すべてを必然の流れに委ねようとすると彼の姿を克明に描きながら、平家物語の作者は、定められた運命の静かな受容者としての彼の在りようを際立たせてゆく。

重盛は、運命のままに生き、運命の命ずるままに逝く。彼には、自身の力によって運命を切り開こうとする意志はなく、また、現世におけるみずからの活動が運命に変転を齎す可能性への信憑もない。独特な先見性は、「不思議の人」たる彼の本性を浮き彫りにする。しかし、先見性に基づいて、苛酷な運命を別の方向に向け変えようとする果敢さの裡に「もののふ」の本来性が存するとするならば、重盛は、もはや武人ではないと言っても過言ではないであろう。

この重盛と知盛とを比較するならば、一つの共通性を認めることができる。すなわち、一門の衰滅を予見した重盛において顕著な運命への随順の姿勢は、「見るべき程の事は見つ」と述べて蒼海に身を投ずる知盛にも認められる。重盛と同様に、知盛もまた運

命の受容者であったと言えよう。しかし、両者は、それを受容した後の態度に関して、決定的なまでに類を異にしている。重盛においては、運命を受容することが、そのままただちに自己が置かれた現実に対して諦念を抱くことを意味していた。この諦念のゆえに、彼は一切の医薬を拒否して逝った。ところが、知盛は、運命を受け容れつつもなお積極的な行為者、すなわち武人として現実を生き抜こうとする。終局に立ち至るまで、あくまでも諦念や絶望とは無縁な彼の生きざまは、父清盛のそれと類を等しくする。では、清盛は運命に対してどのような態度をとったのか。

## 第二章 運命に抗う者―清盛―

治承五年（一一八一年）二月末、源頼朝追討の任を帯びた平宗盛率いる軍旅の進発を目前にして、平氏の総帥平清盛は突如病に倒れる（巻六「入道死去」）。全身に火を燃やすような熱病に襲われたのだ。「すは、しつる事を」（それ、してやったぞ）という声が巷間に充満するさなか、一門の人々はこの病を癒すことに奔走する。たとえば、比叡山の千手井の水をはった石舟のなかに清盛の体を浸してみた。だが、石舟の水は沸騰して湯に変わってしまった。算の水を引いて、清盛の全身にかけてみたが、焼け石のように水を弾いてしまう。施す術はなく、清盛の命運はいよいよ尽き果てようとしていた。

閏二月二日、清盛の嫡妻時子（二位殿）が枕辺に寄り添い、もはや回復の見込みがない旨を告げながら末期のことばを尋ねたとき、苦悶の色を浮かべつつ清盛は言った。

われ保元・平治よりこのかた、度々<sup>トビト</sup>の朝敵をたいらげ、勸賞<sup>ケンショウ</sup>身にあまり、かたじけなくも帝祖・太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ。今生の望<sup>ノゾミ</sup>一事ものこる処なし。たゞし思ひをく事としては、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝<sup>サキ</sup>が頸を見ざりつることやすからぬ。われいかにもなりなん後は、堂塔をも立て、孝養をもすべからず。やがて打手をつかはし、頼朝が首をはねて、わがはかのまへに懸くべし。それぞ孝養にてあらんずる。（俺は、保元・平治の乱以来、再三再四朝敵を鎮圧し、朝廷から身に余るほどの恩賞を頂戴してきた。ありがたいことに、天皇の祖父となり太政大臣の地位に昇って、この身の栄華は子や孫にまで及んでいる。今生においてやり残したことは一つもない。ただし、気がかりなことが一つある。それは、伊豆の国の流人頼朝の首をいまだに目にすることができないことだ。俺が死んだ後は、堂塔を建てたり、孝養をしたりしてはならない。即刻追討の軍を送り、頼朝の首をはねて、それを俺の墓の前に掲げよ。それこそが供養というものだ。

―巻六「入道死去」―

諸国の源氏が蜂起し、各地で危機的な状況が生じていることを、清盛は知らなかったわけではない。嫡孫平維盛を主将とする七万

余騎の追討軍が頼朝麾下の関東勢の前に為す術もなく敗走したと、あるいは急を告げる北陸の情勢、離反相次ぐ南海・西海両道の情勢などは、武家の棟梁としての平氏の地位が瓦解しつつあることを端的に物語っていた。そうした諸情勢に、もはや避けようもない己れの死が加わることによって、平氏の運命がいよいよ傾いたことを清盛ははっきりと認識していたに違いない。

歴史上に実在する人物としての清盛は、機を見るに敏であるとともに、熟慮の上に個々の行動を決する人物であつたらしい。この点に関しては、平治の乱終決以後の清盛の行動について、愚管抄が「清盛ハヨク／＼ツ／＼シミティミジクハカラヒテ、アナタコナタシケルニコソ」と述べている（巻五）ことが参考になろう。

平治の乱が決着を見て後、政治の実権は後白河院のもとに集中したが、当今二条天皇の権威も無視しがたいものがあつた。院と当今のいずれか一方にのみ肩入れするのは得策ではないことを、清盛は冷静に認識していた。彼は、その認識に立つて、院・当今双方に気配りをしていた（「アナタコナタ」していた）と、慈円は言う。「アナタコナタ」することに纏わる曖昧さは、一見優柔不断の発露のように見えるけれども、それは、政界に身を置く者にふさわしい熟慮を示すものでもあると言えよう。清盛は、「アナタコナタ」しながら、権力の動向を見据えていた（機を見ていた）のであつた。こうした人物が、平氏の運命の傾斜に関してまったく無自覚であつたとは考えられない。

ところが、平家物語が描く清盛は、その衰運の前に首を垂れようとはしない。業病の苦悶のさなかにあつてなお、彼は、源氏討滅を望む。「頼朝が首をはねて、わがはかのまへに懸くべし」という末期のことばは、彼が、あくまでも衰運に抗し、あるいはそれを撥ね除けて、一門の繁栄を維持しようとしていたことを如実に示している。平家物語の作者は、清盛の末期の在りようを、「罪ふかけれ」（巻六「入道死去」）と批評する。清盛の生きざま、ないしは死にざまは、諸行無常、盛者必衰を告げる仏教的な哲理への反逆であり、作者はその反逆の裡に罪業の深さを認めているのだと言えよう。

歴史上の人物としての清盛は、宿痾にとらわれる以前から、すでに一門の衰運を鋭く把握していた。治承四年に彼が策した福原遷都は、源氏の勢力と寺院勢力との連合に楔を打ち込もうとの意図に根ざすもので、そうした、積極的な意図の萌芽それ自体が、清盛に衰運を事実として受けとめる認識があつたことを物語っている。しかし、清盛は諦めない。富士川敗戦の悲報に接するや、彼は即座に遷都を決行。同時に四男（厳密には五男）重衡を主将とする数万の軍勢を南都に派遣して、興福寺と東大寺とを焼き、寺院勢力に対して徹底的な弾圧を加える。

平家物語は、清盛を絶望や諦念とはどこまでも無縁の人格として描く。保元・平治の乱を勝ち抜き、伊勢平氏一門を院の番犬から政治の実権の主体にまで引き上げた彼は、衰えゆく運命に抗し



て自分たちの現下の地位を守り続けようとする。そこには、自力で運命を切り開こうとする武人の姿があり、平家物語の作者は、それをこそ罪深い性に見なしているのだと言えよう。そして、その罪深い性は、清盛から武人的素質を最も強く受け継いだ知盛にも認められる。

たとえば、平家滅亡を決定的なものにする壇浦合戦に臨んで、知盛は、重臣阿波民部重能の首をはねようとする（巻十一「鶏合壇浦合戦」）。子息田内左衛門教能を源氏方に奪われた民部の愛心が察せられたからである。案の定、合戦は、民部の裏切りを機として平氏の敗滅へと推移するのだが、平氏の総帥宗盛は、証拠不十分を理由に知盛の発案を斥ける。滅亡を必至とする状況下で、なお不審を理由に自軍の一翼を担う家臣を誅殺しようとする態度が、たとえ武人として当然の振舞であるとしても、平家物語の発想そのものに即してとらえれば罪深いものであることは否定し難い。知盛は、父清盛と同様に、運命に抗する武人であつたと言えよう。

ところが、平家物語の作者は、そうした知盛を、罪深い人物としては描かない。作者は、滅びの定めを予知してみずからの死を願った重盛と同様に、知盛を運命への理知的な覚者として描写する。それはいったいなぜなのか。本稿は、当然このことを問わなければならない。しかし、その前に、平家物語の作者が、運命の齎す必然の定めに無頓着な者の生きざまを描くに際して、残酷な

までに否定的な姿勢を示していることを明らかにしておきたい。それを明確にすることによって、この物語の主題がよりいっそう鮮明になるように思われるからである。

### 第三章 運命に対する無自覚者―義仲―

源義仲（木曾義仲）は、義朝の弟義賢の第二子で、父を義朝の長子義平に討たれた（平治物語は、「十五の年、武蔵国大倉（のいぐさ）大將として、伯父帯刀先生義賢をうちしより以来…」という悪源太義平の発言を記す〔中巻「待賢門院の軍の事付けたり信頼落つる事」〕引用は、岩波日本古典文学大系『平治物語』に拠る）ために、坂東を逃れ、信州木曾の地で中原兼遠によつて養育された。嫡系でないとはいえ、八幡太郎義家の血を引くこの剛毅な青年武將は、頼朝挙兵の報を受けて、みずからもまた東山・北陸両道を切り従えて平氏を討とうと企てる。寿永元年（一一八二年）九月、義仲は、信濃国横田河原において平氏方の武將城四郎長茂の大軍を破り、信濃を制圧した。そして、翌年四月までには東山・北陸両道を支配下におさめて、平氏の追討軍と対峙。同年五月俱利伽羅峠の合戦で、平氏軍を撃破。さらに、加賀篠原における追撃戦にも大勝した彼は、一路都をめざして南下する。

義仲の進撃ぶりはめざましい。北陸での勝利から三ヵ月後には、はやくも京都を制圧し、程なく平氏討伐の軍を西国に差し向ける。

だが、義仲の進撃は、当時の軍事情から見るに、性急にすぎた。富士川大勝後の頼朝が試みたように、軍事的拠点（頼朝の場合には関東）の地固めこそが急務であり、それを欠いた義仲の入洛は、兵力維持の原則から大きく外れるものであったと言わざるをえない。兵を養うには、糧秣が欠かせない。信濃・北陸を拠点とする義仲の軍勢は、糧秣を現地（京都とその周辺）から徴発（掠奪）せざるをえず、それが、畿内の民衆の反感を煽り、かつ、軍の規律の弛緩と弱体化とを招いた。義仲軍の掠奪を遺憾とする後白河法皇との関係も、次第に冷却する。一方、忠盛以来の在地との結びつきのなかで、瀬戸内に強大な軍事的徴発権をもつ平氏は、たちまち京都奪還の基盤を確保する。義仲の追討軍は、西国の平氏の前には無力であった。彼の軍勢は、備中水島で、知盛および能登守教経率いる平氏軍に大敗を喫した（巻八「水島合戦」）。

この前後から、義仲の破竹の勢いは軍事的にはもとより、政治的にも翳りを見せ始める。義仲を与し易しと見た後白河法皇が、頼朝と結ぶべく、侍臣中原康定を関東に送った。法皇は、公家の荘園・国領の紛争処理権を含めた東国の行政権を承認する宣旨（いわゆる「寿永二年十月宣旨」）を頼朝に与えた（平家物語巻八「征夷將軍院宣」の段には、「鎌倉の前右兵衛佐頼朝、ゐながら征夷將軍の院宣を蒙る」とあるが、これは、史実を九年繰り上げた記述で、何らかの意図に基づく同物語の粉飾）。このことは、法皇が義仲の拠点北国の支配権をも頼朝に付与したとの誤報となって、当

時西国の軍旅にあった義仲のもとに伝わる。この報に接した義仲は、「此状為義仲生涯之遺恨也」と悲憤し（玉葉寿永二年十月二十日条）、急遽京都に引き上げ、以後、法皇と激しく対立する。関東には法皇と結ぶ頼朝が盤踞し、その先遣部隊（範頼、義経の部隊）はすでに上洛の途についていた。一方、西国の平氏は、虎視眈眈と京都奪還の機会を窺っていた。この期に及んで、もはや義仲の運命は尽きたと言わざるをえない。

ところが、平家物語が描く義仲は、自己の衰運を自覚しない。否、彼には、そもそも個的な力を凌駕して万事を定める理法についての認識がなかった。そうした認識を欠いたままに、義仲は法皇との対立を続け、ついに、寿永二年十一月、数千騎の兵を以て院御所法住寺を攻撃する。軍兵二万余が籠もるとはいえ、寄せ集めの烏合の衆にすぎない院方には抗する術もなかった。戦いは、義仲の一方的な勝利に終わる。しかし、この勝利は、義仲が自己の権勢の後ろ楯を完全に失ったこと、換言すれば、来たるべき頼朝や平氏との決戦に際して、彼が大義名分を喪失したことを意味していた。勝利は束の間のもので、義仲敗滅の予兆でしかなかった。運命を把握する者は、このことをはつきりと認識しえたであろう。運命の覚者であれば、己が勝利を不安と焦慮を以て受けとめたに違いない。しかし、平家物語が描く義仲は、あまりにも天真爛漫であった。

法住寺合戦に勝利を収めた義仲は、家子・郎等を集めた評定の

座で、次のように言い放つ。

抑義仲、一天の君にむかひ奉て軍には勝ちぬ。主上にやならまし、法皇にやならまし。主上にならうと思へども、童にならむもしかるべからず。法皇にならうと思へども、法師にならむもをかしかるべし。よしさらば閑白にならう。(そもそもこの義仲は、一天の君たる法皇に対して戦を挑み、それに勝ったのだ。さて、この上は、天皇にならうか。法皇にならうか。天皇にならうとは思ふものの、童子の髪型にするのもどうかと思われる。法皇にならうとは思ふものの、坊主になるのも奇妙な話だ。よしよし、そういうことであれば、閑白にならう。―巻八「法住寺合戦」)

東国からは頼朝、西国からは平氏と、強大な二大勢力に挟まれ(平家物語巻八「法住寺合戦」や愚管抄巻五等によれば、義仲はともに頼朝に対抗すべく平氏との同盟を図ったが、双方の思惑に齟齬が生じて、計略は失敗に帰したらしい)、あまつさえ、法皇と和解の余地なき敵対関係に陥った義仲には、伝来の一切の権威を排してみずから新王朝を開くことが、残された唯一の方策であったのかもしれない。そう考えれば、上記の発言も単に野放図な放言にとどまるものではないとも言えよう。慈円の愚管抄によれば、法住寺合戦で勝利を得た義仲は、配下の者が差し出した天台座主明雲の首を「ナンデウサル者」(こんな奴が何だ)と言って、西洞院川に投げ捨てさせたという(巻五)。義仲は、権威を、そして在

来の制法を根底から否定しつつあったのであり、それを否定した上でまったく新たな体制を樹立しようという意図を彼はもっていたのかもしれない。ところが、平家物語が描く義仲は、そのような明確な政治的意図とは無縁の、無思慮で単純極まりない人物ではない。

平家物語(巻八「法住寺合戦」)によれば、「さらば閑白にならう」と言った義仲は、供奉の右筆大夫房寛明に「閑白は大織冠の御末、藤原氏こそならせ給へ。殿は源氏でわたらせ給ふに、それこそ叶ひ候まじけれ」(閑白は大織冠藤原鎌足の子孫、つまり藤原氏を名乗る人がおなりになるものであつて、殿は源氏であらせられるのですから、それは無理でございます)と言われ、あつさりとその言に服する。彼は、「其上は力及ばず」(それならば仕方あるまい)と述べて、院の厩の別当に甘んじる。平家物語は、義仲を、何ら政治上の新構想をもたずに、在来の制法に引き摺られるだけの、無知な田舎武者として描いている。

平家物語の義仲には、自身に帰せられた衰滅の運命への自覚は皆無である。物語の作者は、こうした無自覚を嘲笑する。義仲は、運命に対する無自覚者として戯画化され、その田舎者ぶりを徹底的に嘲弄される。たとえば、「猫間」の段(巻八)には、次のような逸話が記されている。

入洛後まもなく、義仲がまだ権勢をふるっていたころ、猫間中納言光高という公卿が、相談ごとがあつて義仲を訪れた。郎等た

ちが「猫間殿がいらっしゃいました」と告げたところ、義仲は、「猫は人に見参するのか」と笑い、「猫間殿とは宿所の名です」という郎等の説明を聞いて、「それならば」と対面する。それでもなお、義仲は、「猫間殿」と言うことができず、相手を猫扱いにし、その挙げ句、飯時の来訪（公家は一日二食、武家は三食。公家の常識では飯時には当たらない）を理由に、猫間中納言に食事を差し出す。それは、深く窪んだ椀に飯を堆く盛り、菜三種とひらたけの汁を添えたもので、都人の常識からすれば、あまりにも汚らしく食欲を削ぐものであった。中納言が戸惑っていると、義仲は自分の前に据えられた同じ食事にがつがつと食らい付き、中納言にも頻りに勧める。やむをえず中納言が少しばかり箸を付けると、義仲は「猫殿は小食におはしけるや。きこゆる猫おろしし給ひたり。かい給へ」（猫殿は小食でいらっしゃるのか。世に言う猫の食べ残しをなさっている。さあさあ召し上がれ）と強要する。中納言は、あまりのばかばかしさに興醒めして、相談ごとを一言も話すことなく帰ってしまった。

この段に描かれた義仲は、よく言えば幼児性の強い天衣無縫な人物であり、悪く言えば、都ぶりを皆目解しえない野卑な田舎者である。その幼児性、あるいは田舎者ぶりを、運命に対する無自覚的な彼の在り方と結びつけてとらえるとき、義仲への徹底した否定的評価が生ずる。平家物語の作者によれば、運命とは都ぶりの理知性によって把握されるもので、理知の光を欠いた鈍重な田

舎者は運命の流れを到底理解することができない。運命への理知性を欠いた田舎者は、作者にとつて、どこにも同情の余地を有しない、唾棄すべき存在でしかなかった。

しかし、その義仲も、宇治川の合戦に敗れ、近江で最期を迎えようとするとき（終焉の地は粟津）、ようやく自己の衰運如何とも為しがたいことを自覚する。その自覚に立つて、義仲が最後の戦いに臨む段になって、物語の筆致は大きく変化する。それまで義仲を名指す際に概ね用いられてきた「木曾」という呼び捨ての呼称が、「木曾左馬頭」あるいは「木曾殿」といった敬称に変わり（この点については、五十嵐力『平家物語の新研究』に指摘がある）、今井四郎兼平と主従二騎になって一所での討ち死にをめざす場面になると、行間に同情の念が充ち溢れる。平家物語の作者は、滅びゆく者がその滅びを自覚しみずからの命運を見定めたとき、その姿を共悲（この概念については、拙著『日本人の愛』参照）の眼差しによって優しく包みこむのだと言つてよいであろう。このことは、裏を返せば、平家物語が、運命に対する無自覚者を、最も低劣な存在と見切っていることを如実に示している。

わけでも、鹿谷の陰謀事件（平氏打倒の策謀）に参画して鬼界島に流された俊寛への作者の評価は厳しい。俊寛は、丹波少将成経、平康頼とともに配流される。島の生活は辛酸を極めるが、病中であつた中宮建礼門院の平癒祈願の特赦に浴して、成経と康頼の二人は赦免される。ところが、陰謀の場所の提供者であり、そ

の首謀者の一人と目された俊寛だけは赦されない。他の二人が迎え船に乗って九州に渡るとき、俊寛は、船に追い縋って泣き喚く（巻三「足摺」）。そのありさまに対して、「彼松浦さよ姫が、もちし舟を慕ひつゝ、ひれ振りけんも、是には過ぎじとぞ見えし」（あの松浦さよ姫が、任那に遣わされる夫の船にむかつて領巾を振った悲しみも、俊寛にはまざるまい）と、一方では同情を寄せつつも、その一方で平家物語は、「その瀬に身をもなげざりける、心の程こそはかなけれ」と断じている（巻三「足摺」）。

作者は、現実俊寛にとって絶望的な状況にあり、俊寛はそれを悟って自裁すべきであつたと言っている。作者のこの冷徹な見方は、運命に殉ずる姿を美とし、それに殉じえない心の在りようを醜恥とする精神の端的なあらわれ以外の何ものでもない。義仲や俊寛の逸話は、平家物語の主題が、運命に殉じて滅びゆく者のその滅びのさまを美的に描く点に存していたことを明示しているように思われる。平家物語の知盛像は、実は、そうした美的な在り方の一つの典型として造形されている。

#### 第四章 運命の覚者―知盛―

知盛が、平家物語のなかに発話を伴う人物として登場するのは、往年の臨幸の地荒廃を嘆く「聖主臨幸」の段（巻七）においてである。この段によれば、平氏の都落ちに際して、畠山重能ら関東

を本質とする武士たちが斬殺されようとしたとき、知盛は、これを制止して次のように述べたという。

御運だに尽きさせ給ひなば、これら百人、千人が頸をきらせ給ひたり共、世をとらせ給はん事難かるべし。古郷には、妻子・所従等いかに嘆かなしみ候らん。若不思議に運命ひらけて、又宮古へたちかへらせ給はん時は、ありがたき御情でこそ候はんずれ。たゞ理をまげて本国へ返し遣さるべうや候らむ。（こ運が尽き果ててしまったとすれば、これらの者どもをたとえ百人・千人斬つたところで、天下を御支配なさることもありえますまい。この者どもの故郷で、妻子や郎等どもがいかに嘆き悲しむことでしょうか。もし、不思議にも運命が開けて、また都にお帰りの折には、有り難い御慈悲であつたということになるでしょう。ここは、理を曲げて本国へお帰しになるべきではないでしょうか。）

畠山たち東国武者の命を救つたこの発言のなかでとりわけ重要なのは、勝敗の帰趨を決するものが運命であるとの認識が示されている点である。幾度かの合戦を指揮した平氏第一等の前線指揮官ともいふべき知盛は、戦の勝敗が時に指揮の巧拙によって決する場合がありうることを熟知していたはずである。それにもかかわらず、彼が「運命」ということばを口にするとき、そこには、戦争全体の勝敗の帰趨は、時の流れともいふべき巨大な勢いに左右されるという認識があつたものと思われる。時の流れ、時代の

趨勢がもし源氏に傾くならば、いかに人為を尽くしたところで力及ぶものではない……、そういう思いが知盛にはあった。すくなくとも平家物語は、そうした「運命の覚者」として知盛を描いている。

「運命の覚者」たる知盛は、都落ち後の一門の衰運を見とおしている。それゆえ、彼は、一門のうちに都落ちに同調しない者（頼盛）や、それを躊躇する者（小松殿一族）がいることを知ったとき、「都のうちでいかにもならんと申しつる物を」（都の内て討ち死にしようと申したものを）と述べて、口惜しさをあらわにする（巻七「一門都落」）。衰滅が避けえぬものならば、一門の栄華の地京都において、一門轡を並べて壮烈な討ち死にを遂げるべきであるというのが、義仲の軍勢が勝勢に乗じて都に迫った折の知盛の認識であった。

知盛は、この認識を現実化しえぬまま一門とともに漂泊の人となる。だが、知盛は、重盛のような、運命の消極的受容者ではなかった。彼は、蒼海に漂う平家軍を率いて、敢然と戦闘の渦中に身を投ずる。幾度かの小合戦を制し、備中水島では、木曾義仲の大軍を駆逐した。衰滅を知悉しながらの戦闘者としての活動は、戦いの終息を告げる壇浦合戦まで止むことがない。滅びを知りながらもなお、その運命のただなかで武人として決然と行為する彼の姿に、平家物語の作者が限らない美を見いだしていることは疑えない。

しかし、平家物語の描く知盛は、取り澄ました聖者ではない。福原近郊の合戦、すなわちいわゆる一ノ谷の戦いに、生田森方面の平氏方総司令官として出陣した知盛は、退却戦の混乱のなかで長子知章を失う。知章討ち死にの場面を、物語は以下のように記す。

新中納言知盛卿は、生田森大將軍にておはしけるが、其勢みな落失せて、今は御子武蔵守知明、侍に監物太郎頼方、たゞ主従三騎になつて、たすけ舟に乘らんと汀のかたへ落ちたまふ。こゝに兎玉党とおぼしくて、うちわの旗さいたる者ども十騎計おめいて追ツかけ奉る。監物太郎は究竟の弓の上手ではあり、まっさきにすゝんだる旗さしがしや頸のほねを、ひやうふつと射て、馬よりさかさまに射落す。そのなかの大將とおぼしきもの、新中納言にくみ奉らんと馳並べけるを、御子武蔵守知明、なかにへだゝりおし並べて、むずとくんでどうと落ち、とッておさへて頸をかき、立ちあがらんとしたまふところに、敵が童おちあふて、武蔵守の頸を討つ。監物太郎落ち重ツて、武蔵守討ちたてまつたる敵が童をも討ッてンげり。其後、矢だねのある程射つくして、うちもの抜いてたゝかひけるが、敵あまた討ちとり、弓手のひざぐちを射させて、立ちもあがらず、いながら討死してンげり。（巻九「知章最期」）

これによれば、退却戦のさなか敵味方入り乱れての壮絶な乱闘

が行われ、その折、知章は父知盛の身代わりとなつて討ち死にする。知盛は、この乱闘に紛れて沖の兵船に乗り移るが、これは、彼がわが子を見捨てたことを意味する。知盛は、総帥宗盛の前に出向き、知章を討たれ、侍臣監物太郎を失つて心細い身の上となつた旨を語る。その際、知盛は、眼前で子を討たれながらもなおわが命を惜しむ情の切なることをあらわにし、そうした情の生起を恥辱とする認識を披瀝する。彼は言う。「いかなる親なれば、子の討たるゝをたすけずして、かやうにのがれ参つて候らんと、人のうへで候はば、いかばかりもどかしう存候ふべきに、我身の上に成りぬれば、よう命はおしひ物で候けりと、いまこそ思ひ知られて候へ。人々の思はれん心のうちどもこそ、はづかしう候へ」（いったいどんな親が、子が討たれるのを助けもせず、このようにして逃げてきたのかと、もし他人のことであれば、どれほどはがゆく思うことでありましょうに、我身のうえのこととなると、よくよく命は惜しいものでありました、と今になって思い知らされました。一門の人々がお思いになる心のうちが察せられ、恥じ入るばかりです」と。

敗亡の運命を自覚しつつも、なお己が命を惜しみ、わが子を犠牲にする知盛。その知盛に対して、平家物語はけつして非難のこゝとばを投げかけようとはしない。命惜しさゆえの未練な振舞を恥辱と認定し、「袖にかほをおしあてて、さめざめと」泣く知盛の姿（「知章最期」）に、物語の作者は深い同情の念を寄せているよう

ですらある。作者は、おそらく、人間の在るがままの姿を見据えているのであろう。在るがままに在るとき、人はおのずからに命を惜しむ。知盛の「在るがまま」が、彼をして命を惜しませたのだとすれば、誰もそれを非難することはできない。作者はそう考えたのであろう。作者は、己が命を惜しむ知盛の姿に人間味を見いだし、そこに共感を寄せているように見うけられる。

取り澄ました聖者ではありえぬ知盛、運命の覚者でありながらも自身の人間臭さを捨て切れない彼が、運命を受容しつつも意を決して最後の戦いに臨むとき、物語の悲劇性は、いやがうえにも高まる。三千余艘を擁する源氏軍にわずか千余艘を以て対する壇浦海戦に臨んで知盛が麾下全軍に向けて発した以下のことは、作者が平氏の悲劇を集約的に具現する人物として知盛を選んだことを明瞭に告げている。知盛は、舟の屋形に立ち、大音声をあげる。

いくさはけふぞかぎる。物どもすこしもしりぞく心あるべからず。天竺・震旦にも、日本我朝にもならびなき名将、勇士といへども、運命尽きぬれば力及ばず。されども名こそおしけれ。東国の物共によはげ見ゆな。いつのために命をばおしむべき。これのみぞ思ふ事。（戦は今日が最後だ。者どもよ、けつして退こうとする気持ちがあつてはならぬ。たとえ、インド・中国、わが日本国に無双の名将、勇士であつても、運命が尽き果てた以上は、もはや如何とも為しがたい。しかし、

わが名こそ惜しい。坂東武者どもに対して弱気を見せるな。いつ役立てようとして命を惜しむのか。いま、この時を措いてほかにはあるまい。これのみが、戦に臨んでのわが願いである。―巻十一「鶏合 壇浦合戦」

いかなる名将、勇士といえども、運命が尽きたいまとなつては、もはや敗北以外のいかなる結果をも招来しえない。運命の覚者としてそうした認識に立ちながらも、知盛は、麾下全軍に向けて、坂東武者に侮られるな、わが名を惜しみ、命を捨てて戦えと下知する。知盛は、敗亡を見据えつつ敢然と戦おうとするのであり、その戦いは、ひとえに武人としての名を保たんがためのものであった。

平氏敗亡の予測は、ひとり知盛のみならず平氏方の侍たちのあいだにも滲透していたのであろう。累代の家人たちは、それでもなお平氏のために死力を尽くした。だが、諸国から臨時に集められた駆武者<sup>かりむし</sup>たちに、平氏に殉じようという意志はなかった。彼らは、阿波民部重能の裏切りを機として、相次いで平氏に背き、源氏方につく。「いままでしたがひついたりし物共も、君にむかつて弓をひき、主に対して太刀を抜く」(巻十一「遠矢」)という事態が出来る。戦いは一方的な展開を示し、攻め寄せる源氏の兵に水手・梶取<sup>かんじ</sup>たちを射殺され、斬り殺された(水手・梶取は非戦闘員であり、当時の合戦では、彼らに危害を加えないのが不文律であった。源義経の軍は、その不文律を破った)平氏の舟は、大半

が航行の自由を失って波間を浮遊した(巻十一「先帝身投」)。悲劇はいよいよ終局を迎えつつあった。

惨敗を見極めた知盛は、安徳天皇の御座舟に乗り移る。彼は、「世のなかへ、今はかうと見えて候。見ぐるしからん物共、みな海へ入れさせ給へ」と述べて、手づから船上を掃き清め、塵を拾う。この姿に接した女房たちが、「中納言殿、いくさはいかにや、いかに」と問うたところ、知盛は、「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」(めづらしい東男どもをご覧になることでしょう)と言って、からからと笑った(巻十一「先帝身投」)。

女房たちが東男どもを「見る」ということは、敗北後船内に乱入する源氏方の兵どもによって彼女たちが性的な辱めを受けるであろうことを暗示している。女房たちへの知盛の発言は、どす黒い諧謔の域を超えて、ほとんど虚無的ですからある。一門の敗滅を見極めた知盛は、これ以上定め<sup>さだめ</sup>に抗することを無意味と見る視座に立っているものであり、その視座が、彼を虚無的な哄笑へと導いている。

勝敗が決してなお、ひとり奮然と戦う武者があつた。清盛の弟教盛の子能登守教経である。「いかものづくりの大太刀」と「しら柄の大長刀」とを左右の手に持つて薙ぎまわる教経を前にして、勝者源氏の武士たちは為す術もなかった。死に狂いに狂う敗残者を倒すことは至難であり、源氏の武士たちもたじろいでいたのであろう。そのありさまを見て、知盛は使者を送り、次のように言



わせる。「能登殿、いたう罪なつくり給ひそ。さりとてよきかたきか」(教経殿、あまり罪つくりな殺生をなさるな。そんなことをしたとて、あなたにふさわしい相手であろうか)と(巻十一「能登殿最期」)。この発言は、戦いの帰趨が決したいま、敵兵を殺戮することに意味があるとは思えないという認識を披瀝するもので、知盛が深い諦念のうちに沈んでいることを如実に示している。この発言を、敵の雑兵にかかずらわることなく一向きに敵將に挑めの意と誤解した教経は、敵將義経を求めて敵船に移り移る。いま一步のところまで義経を追い詰めた教経ではあったが、二丈程の距離を跳躍して逃れた義経をさらに追うことはできなかった。教経は、源氏方の屈強の武士を二人両脇に抱えこんで海に身を投げて果てる。

一部始終を見終えた知盛は、「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」と述べて、鎧二領を身に纏い、めのと子伊賀平内左衛門家長と手を取り合つて身投げする(巻十一「内侍所都入」)。知盛が見たものは、一門全体の衰運であり、衰滅の具相であった。都落ちを拒み、頼朝との縁故に頼つて生き延びようとする人々。平氏の権勢ゆるぎなき時代には媚び諂ひながら、衰運いちじるしいと見るや平氏に背いた公卿や武者たち。自裁によつて苛烈な運命から逃れ去つた小松殿一門の公達。勝利のためには手段を選ばず、非戦闘員すら手にかけて恥じるところのない敵將の戦いぶり。浪の下に都を求めて蒼海に身を投じた天皇とその祖母。敗滅の機に

及んで、自害することすらできずに敵手に捕われた一門の総帥。知盛は、一門を衰滅へと引き摺る運命が現実のただなかに具象化するあらゆる事態、すなわち衰滅の運命を構成する全要素を、みずからの目で見て取り、そのことを以て見るべきものをすべて視野に収めえた(「見るべき程の事は見つ」としたのであった。

知盛がすべてを見極め、そして散華していった後に残るものは、虚ろな敗残の光景であった(巻十一「内侍所都入」)。海面は、投げ捨てられた赤旗や赤じるしに蔽われて、龍田河の紅葉を嵐が吹き散らしたような有様。汀に打ち寄せる白波は、血潮によつてうつすらと紅に染まり、主を失つた数多の舟が潮に流され、風に煽られて、何処を指すともなくゆらゆらと揺れていた。平家物語は、知盛の目がすべてを包摂したことによつて、事実上の終幕を迎えたと言つてよい。「主もなきむなしき舟は、塩にひかれ、風に從つて、いづくをさすともなくゆられゆくこそ悲しけれ」という一文(巻十一「内侍所都入」)が、余韻を引きつつ、語りの終息を告げるという構造も、平家物語がとりえた一つの姿であったように思われる。

錯綜した編纂過程を経た平家物語の或る段階での完結態が、その一文で終わつていたと説いていのではない。そこで物語を打ち切り、最後の合戦終決直後の静謐の裡にすべてを押し込める方が、後日譚を長々と語るよりも、むしろ語り物としての完成度が高まつたのではないかと、述べているにすぎない。享受者にかよ

うな感慨を齎すほどに、知盛の目と作者のそれとはしつかりと重なり合っている。海上をむなしき舟が漂流するさまを見詰める作者の目は、知盛と同じくすべてを見切っていたはずである。そうであるならば、以後に展開されるあまたの逸話は、是非とも必要であるとは言えない補足であると言っても過言ではないように思われる。本稿のこれまでの考察によれば、平家物語が真に意図したのは、運命とその具象的なあらわれを見極めることであつたと考えられる。とするならば、平家物語は、知盛の死とともに物語としての内質を完成させていると言つてもよいのではないか。

### 結論

平家物語は、平氏一門を全体的にとらえる視点から見れば、滅びの運命を描く文学にほかならないし、それを一門を構成する個々人に焦点を当てる視点からとらえなおすならば、運命の具象化する姿、つまり個的な死を逐一叙述する文学であると言える。このことを総括すれば、歴史的運命の自覚と個別的な死の定めに対する透徹した認識とを叙事的な視座から語り尽くすところに、この物語の主題を求めることが可能になってくる。そうした主題は、仏教、ことに浄土教的な発想によつて多分に色付けされている（たとえば、一ノ谷の合戦で虜囚となつた重衡と法然の交流を描く巻十「戒文」など）けれども、そのような装飾が物語全体に

質的な変化を齎すとは言えない。冒頭に提示される「諸行無常」「盛者必衰」という観念は、たしかに、滅びの物語の内質を一語を以て集約する観念として機能しているが、その物語は、これらの仏教的観念の単純な具象化にとどまるものではない。物語の作者は、滅び去るものの滅びへの自覚の裡に美を見いだしており、その美意識が観念の上に加上されている。物語は、さらに、「あはれ」「悲し」という嘆きを伴いつつ、運命に翻弄される現身の姿を描いており、そこには仏教的哲理の単なる翻案を超えた詠嘆的美意識が貫かれていると見るべきであろう。

その詠嘆的美意識のもとで、もつとも美なるものと目されるのは、運命を自覚しつつもなお敢然と人為を尽くす人間の在りようであり、そうした在りようを具現して在る人物として描かれるのが知盛である。平家物語は、知盛のみならず、重盛をも運命の覚者として描く。否、運命への自覚の質において、平家物語の描く重盛は知盛をはるかに凌駕する。しかし、すべてを悟り尽くした重盛は、人間の卑俗性を全的に超越するがゆえに、物語の作者がそこに人間的美を認める対象とはなりにくい。儒仏の思想に通暁し、毅然として事物の道理を説き続ける重盛像は、荘重でこそあれ、人間の口を通して語られるべき美に欠ける。しかも、滅びの定めを知悉するがゆえに自裁にも似た死を選ぶその姿は、武人としての果敢さをもたない。武人として、より美しく、より果敢なのは、運命の流れに押し流されながらもなおその流れが切断され

る可能性を虚しく希求し続け、その希求のさなかに人間臭を露呈してしまう知盛である。作者の詠嘆的美意識は、重盛よりも知盛をいつそう高く評価する視座を定めていると言つてよい。そして、その詠嘆的美意識に根ざした人物評価が、知盛から、彼が父清盛とともに共有する罪深さ（本稿二参照）を剥落させる。平家物語において、知盛が運命への理論的な覚者としてのみ描写される所以である。

作者の詠嘆的美意識が、逆に、醜恥なるものと見なすのは、滅びの定めに対して無自覚なままに運命に翻弄される人間である。具体的には、遠流の島に果てるべき己が運命をとらえきれずに、赦免の舟に縋り付く俊寛や、あるいは、自身が置かれた政治的かつ軍事的な状況に対して無頓着であることしかできない義仲が、詠嘆的美意識の埒外に置かれる。運命への微かな認識を示しながらも敢えて真つ向からそれに反逆しようとする清盛もまた、作者にとつて度しがたい人物であつた。運命には如何にしても抗いえない。それを従容として受け容れながら、なおも人為を尽くすところにこそ人間の美はある、と作者は説き続ける。そうした主張をもつ作者は、運命への無自覚者に対して、共悲の念はおろか同情の念すら有しえなかつた。

ただし、このことは、作者が清盛や義仲に対して全面的に否定的であり続けたことを意味するわけではない。人為のかぎりを尽くして一門の衰亡を抑止しようとする清盛の執念に対して、作者

は一方では罪深さを感じつつも、他方では賛嘆の念を禁じえないでいる。巨大な化け物の出現に慌てふためくこともなく、それを「にらまへて」立つ清盛の姿（巻五「物怪之沙汰」）は、そうした賛嘆の念の端的なあらわれにほかならない。また、最後の戦鬪での敗北が決定的になった状況のなかで、ようやく己が死の定めを悟った義仲に対して、作者はかぎりない同情を寄せる。運命を悟って在る、その在り方を重んじつつ、そうした悟りの渦中に在ってなお人為を尽くす態様を高く評価する視点は、清盛や義仲に対する一面的で単純な非難を作者に思いとどませたのではなかつたか。

思うに、滅びの運命とは、ひとり平家一門にのみ関わって在るものではない。承久の乱後に原型を成したとおぼしい平家物語の作者は、すでに源氏の滅びを目のあたりにしていたはずだし、事実、自身の嫡系以外の親族を誅戮する頼朝の姿を描く（たとえば、巻十二「判官都落」）は、頼朝が舍弟範頼を討つたことを記す。ただし、史実としての範頼誅殺は平家物語の語るところより八年後、建久四年のことであつた。これをあえて八年も遡らせたのは、平家物語の作者に、頼朝の強烈な猜疑心が源家嫡流の滅亡を導くであろうことを示唆しようという意図があつたことを表わしているように思われる。ことによつて、平家物語は、源氏の滅びの定めを暗示している。源氏に替わつて支配権をふるう者も、やがては虚しく滅び去るであろう。否、権力者のみではない。支配される

者として、先々の見通しもないままに日々を平板に生きるわれわれ衆庶も、かならず滅びの定めをみずからのものとして身に負わなければならない。「死への存在」(Sein zum Tode)にほかならないわれわれ人間存在は、いつもすでに代行不可能な死の可能性に晒されて在るのを常態とするのである。

いつ訪れるとも予想のつかない死。われわれは、たったひとりで引き受けざるをえないその死を、いわば運命として荷なっている。見方によっては、平家物語が語るものは、こうした運命に対していかに対応すべきかという問題であるにとらえることもできる。

死を意に介することなく、さながら自己の生が永続するかのように日常性のなかに埋没する魂は、運命の自覚の有無という視点から見た場合、一種の頽落を指示するものでしかない。平家物語を、そうした頽落を嫌厭する文学と見なしてもあながち的外れではあるまい。それは、頽落から脱し、運命(死)への先駆的な覚悟性をもつことに積極的な意義と人間的な美とを見いだす文学だと言っても過言ではないであろう。そうした先駆的覚悟性は、この物語の場合、ひとえに知盛によって具現される。知盛のごとくに、運命を先取りしながらもなお現実を全力で生きよ。平家物語は、われわれに對してそう語りかけているように思えてならない。

もとより、特定の美意識によって貫かれた物語が、道徳的・倫理的な教戒を垂れることにその眼目を置いているとは考えられない。

い。つとに本居宣長が指摘しているように、わが国固有の各種の物語を教戒による徳義の向上をめざすものにとらえるのは、事柄の本質を逸した偏頗な見方でしかないであろう。おそらく、平家物語は、自己の美意識に忠実であろうとこそすれ、みずからの語りをとおして、人生の教訓を披瀝しようと思図するものではありえない。しかし、滅びへの先駆的覚悟性を称揚するその基本姿勢の裡に、先駆的覚悟性と無縁な魂への侮蔑の念が潜んでいることは否定できない。平家物語は、独自の美意識を強調することをおして、その美意識から逸脱する者を排斥する文芸、言いかえれば、滅びの定めを先駆的にとらえつつ在る、その在り方に美的実存を見いだしつつ、そこから逸脱して在る態様を陋醜として峻拒する文芸であったと言えよう。そこでは、煩瑣な悟性的論理の複合によって成る徳論は廃棄されており、それゆえ、この物語は教戒とは無縁である。しかし、それは、感性的論理に根ざした固有の美意識を強調しつつ、それに基づいて在る人間的態様を、生き方に関する一つの理念形として呈示する作品にほかならなかった。

(一九九八年九月一日)

## The Picture of Tomomori in *Heikemonogatari*—What did he view?

Susumu ITOH

This paper aims at revealing the theme of *Heikemonogatari* by inquiring into the picture of Tomomori in this story. In this story Tomomori speaks for the author (or authors), therefore we can grasp the thought of the author by following Tomomori's speech and conduct. As a result of the investigation this paper acquired the following conclusion.

The purpose of *Heikemonogatari* is praising the man who recognizes the fate of his ruin and death. Tomomori is the keenest person concerning the recognition of the fate. Therefore this story gives him the highest estimation. On the contrary, this story despises the men who are indifferent to the fate of their ruin. For instance, Yoshinaka, who is regarded as a rustic (the ignorant of the fate) by the author, incurs a author's displeasure. But the author does not make a denial of him completely. When Yoshinaka looked his death in the face at the his last battle and caught the fate calmly, the author sympathized him deeply.

In short, *Heikemonogatari* is a literary work that in accordance with the grade of self-consciousness of the fate estimates the dramatis personae and through the estimation indicates the guides of our life. We are respectively the „being to death“ (Sein zum Tode). *Heikemonogatari* has the opinion that human beings must receive the death (or the fate of death) in advance because of their being-modus.

However, *Heikemonogatari* does not intend to give the readers moral-ethical teachings. *Heikemonogatari* is penetrated by a literal consciousness of beauty, and its estimation for its dramatis personae is based on the consciousness.